

礎の上に洋館を建築して始めて堅固であり、倒壊しないのである。民國は今日既に十三年、其の間幾回倒れたか、諸君は御承知であらう。民國四年には、袁世凱が自ら皇帝となり、中華民國を改めて洪憲帝國としてしまった。之れが民國の倒れた第一回である。民國六年には、張勳が復辟を行ひ、宣統を再び擁して皇帝たらしめ、中華民國を改めて大清帝國とした。之れが民國の倒れた第二回である。現在、曹錕は金錢を以て大總統の地位を買ひ、吳佩孚は武力を利用して中國を統一し、事毎に専制を恢復せんとして居るが、之れまた民國の土臺を取り拂はんとするもので民國はまたも倒され様としてゐる。民國成立以來、十三年に過ぎないが、どうして二度も三度も顛覆されるのであらうか。之れは國家の基礎が強固でないからである。從來國家の基礎は深く掘り下げもせず、堅固でもないのに、其の基礎の上に民國を建築せんとしたからで、あたかも、基礎を深く掘り下げず、堅固にしないで置いて、其の基礎の上に高層の大洋館を建築せんとするが如きもので、之では永久に倒れない理由が有り得ない。吾人は國家を鞏固にし、永遠に倒れぬ様に爲すためには、如何なる基礎を用ふべきであらうか。人心を以て基礎とするを要する。人々の心を以て基礎とせねばならない。人々が心より民國に賛成し、民國に心を傾ける。かくてこそ民國は倒れる事なく鞏固たり得るのである。十三年前滿清を顛覆し、民國を成立せしめたが、一般の

武人官僚は表面民國に賛成し乍ら、心中では一向民國など考へた事はないのである。彼等が心中、いづれも民國に不賛成であつたればこそ袁世凱が北京に於いて皇帝となつたばかりでなく、龍濟光までが廣東に於いて龍王などと稱したのである。若し今後確りした國家の基礎が無いならば、將來必ずや、皇帝となるものが現れ、諸君を奴隸たらしめ、中國はただに強盛となつて列國と同等に比肩する事を得ぬのみならず、外國は必ずや中國を亡ぼそうとするであらう。現在、列強は中國に對し共同管理論を主張し、中國人は自治の能力を有して居らぬ。從來頗る野蠻な滿洲人でさへ中國を支配し得、其の支配も極めて久しきに亘つたが、革命後は反對に平和を缺き、依然、法に従つて自ら治め得ないと論じて居る。そして彼等文明國は、吾人に代つて中國を統治すること即ち共同管理を要求してゐるのであるが、共管は從來の分割論同様の論調であつて、中國が列強に共同管理される事は、とりもなほさず亡國に外ならない。斯くては中國人は久しからずして絶滅に歸してしまふであらう。

諸君が、歸宅されて、若し家人から民國に反對される事が有つた場合には、上に述べた道理を以て彼等に詳細に説明し、民國はなほ出來上つて居らないのであるから、一般國民は目前には犠牲たらざるを得ず、忍耐せざるを得ないが、國家が徹底的に改造された時には我々は永遠に安樂

を得られる事を話していただきたい。では國家は如何にしたなら立派に改造されるか。建國の基礎有つてこそ出來上るのである。建國の基礎は、即ち萬衆一心、民國を歓迎することである。あらゆる人々がみな民國を歓迎し、民國に反對せざるに到つたならば、民國は永遠に動搖する事はないであらう。諸君は卒業の後には、人を教へなければならぬ身であつて、中國二億の女性が、民國を歓迎するか、せぬかは、全く諸君の宣傳にかかるものである。本校は設立されて十七年になり、十三年前の帝制時代には、他の人が經營して居たが、民國時代になつてからは廖校長が繼續して其の事に當つて居られる。廖校長は民國の新教育家であり、民國の新福音を宣傳しつつある人である。校長は平生此の道理を、必ずや諸君に幾回となく話されて居る事と思ふから、諸君は此の道理に對して既に明白に理解されて居るであらう。諸君はみな師範學校の學生であつて、卒業後は、人の師長となる人である。若し人の師長たる人が、誰も民國の道理を辨へなければ、吾人は永遠に民國の基礎確立を希望し得ないのである。

今日、廖校長が余を講演に招かれたのは、如何なる希望からであらうか。余は一個の革命黨員で好んで革命の道理を提唱して居るものであるが、今日本校に来てお話しして諸君に希望したい事は、余の話を聴きになつた後には、誰もが革命黨員に變じ、三民主義を宣傳し、中國を富強に

して、英米と雁行せしめる事である。

諸君の用ふる宣傳方法は、まづ人に就いて論ずれば、當然、近きより遠きに及ぼさねばならない。先づ父母兄弟姉妹、及び總ての家人に説明し、更に親戚朋友及び一般普通人に對して説明する。言葉に就いて云へば、使用する言葉は、まさに親切で興味有るものでなければならず、人々の知つて居る材料を選択する必要がある。例へば民族主義を宣傳する際の如きは、此の主義は外國人との不平等を打破せんとするものである事を説明するを要する。從來滿人が中國の皇帝となり、到る處滿洲人が官吏となつて吾人を支配し、吾人はいづれも彼等の奴隸であつて漢人と滿人とは頗る不平等であつた。吾人は民族の平等を欲するが爲めに滿人を排除せねばならなかつた。現在は滿人の奴隸たる事は脱却したが、なほ外國人の奴隸として、中國は事々物々外人の干涉、外國人の管理を受けて居る。廣東の郵政局と税關との如きは外國人の管理を受けて居るが、これ亦甚だ不平等な話である。吾人が此の不平等を除去せんとするならば、民族主義を提唱し、民族主義に賛成せねばならない。また民族主義は、對内的不平等を打破するものである。中國は十二年前には皇帝が存在し、皇帝の下には公侯伯子男の數多の階級が存して居り、彼等はいづれも高く上に位し、人民は盡く極めて低い地位に在つた。之れは頗る不平等な事態である。吾人は民族

主義を主張して、此等の階級を平等とし、政治上各人みな平等ならしめる。即ち男女も亦平等である。故に吾人の革命後は、男女同権を實行し、廣東の省議會には女子議員があり、女性は男子同様に議員となり、國家の大事に參與し得るのである、その地位たるや、何と高尚ではないか。また何と光榮あるものではないか。諸君の知らるる如く、近來外國婦人は參政權を得んとして、幾多の力を費し、幾多の心血を犠牲としたか計り知られぬが、なほ多數の國家に於いては之を獲得するに至らない。中國は革命後、婦人が之を争ひ求める迄もなく、婦人に參政權を與へ、議會の中に婦人議員を設けた。併し一般婦人はいづれも此の參政權に熱意がなく、議員となつた婦人も永續しがしないで、熱がさめて冷淡になり、引續き奮闘しない。廣東でさへ此の通りであるから、他省の事は推して知るべしである。故に二億の婦女子は今日に至るも、依然として民國を理解せず、國事を處理する事も出来ない。諸君は今後、吾人の民權主義中に包括されて居る男女同権の理論を以て、二億の婦人に宣傳し女性の方面に於いて民國の基礎を建設するを要する。彼等をして、從來の地位は非常に低くかつたが、今日の地位は甚だ高い事を知らしめねばならない。此の婦人の地位が高められた原因は、即ち吾人が民權主義を主張したからである。民生主義は如何なる用法を有するものであらうか。之は大富豪に對して不平等を打破するに用ゐられる。國

家が平和となれば、資源を開發し、其の得る所の利益は少數人の獨占を許さず、多數人の共同利益とし、國家の利益は一般に均沾される。少年は教育を受け、壯年の人は職を有し、老人は生活の保證が與へられ、全國の男女は、老となく幼となく、悉く安樂に日が送れる。即ち以上が三民主義の效用である。更に簡単に云へば、民族主義は、外國人に對して平等を求め、外國人が中國人を僞瞞する事を許さぬものであり、民權主義は、本國人に對して平等を求め軍閥官僚などの特別の階級の存在を許さず、全國男女の政治的地位をすべて一律に平等ならしむるものであり、民生主義は貧富の平等を求め、全國の男女に大富豪と貧民との差別あるを許さず、すべて働く者にはみな食あらしむるものである。これが即ち三民主義の大意である。諸君が今詳細に此の三種の主義を研究せんとするならば、専門の書籍を編み、今後隨時讀書し得る様にした。諸君が此の三民主義を理解されたならば、中國とは如何なる共和國であるかが明白となる。現在の中華民國は即ち諸君の資産であり、諸君はいづれも此の資産の主人公である。若し人の師長たるべき婦人が家事の處理について昏かつたならば、此の資産の將來は何の希望もない。故に諸君の責任は誠に重大である。諸君は三民主義を理解する以外に、根本的には更に吾人の革命が常に如何なる目的に向つて居るかを理解するを要する。我が革命黨の目標は、常に國家の富強ならんことを求め

てゐる。此の目的を達成する爲めには、更に諸君の賛成によらねばならない。賛成の方法は、三民主義を理解し、民國の基礎を鞏固にするに在る。民國の基礎を鞏固ならしむるには、三民主義の理解を人心に注射し、人々を心から均しく共和に傾かしむるを要する。人々が心から共和に傾すれば、其の時こそ中國には最早皇帝が出現することなく、富強を致し得るのである。佛國、米國の永遠に富強である所以は、即ち皇帝がないからである。露國は六年前に皇帝を倒して共和を布き、六年來、一般人民が明らかに共和の道理を理解したので、其の後露國には、當然皇帝たる者はない。よつて露國は大いに富強を期待し得るのである。中國は共和成立以來、今日十三年に過ぎないが、其の間顛覆さるる事二三回に及び、いづれも皇帝たらんとする者が現れたが、之れは國家の基礎が鞏固ならず、人心なほ共和を歓迎せざるによるものである。今日、余が本校に於いて御話して、希望することは、先づ諸君が共和を理解し、自分が理解したならば更に宣傳して、諸君の父兄家族、及び親戚朋友全部に理解させ、總ての人を共和に賛成させ、共和を歓迎させていただきたい事である。

同胞は皆三民主義を

—民國十三年五月三十日、上海中國晚報の請に應じて—

第一、諸君、我々は中國の人間である。我等は中國が幾千年來世界第一等の強國たりしこと、我等の文明の進歩は各國に先んじて居たことを知つてゐる。中國の強盛なりし時代には、正に所謂、千邦進貢し萬國來り朝すであつて、其の時代には中國の文明は世界第一であり、中國は世界の第一等強國であつた。現在に及んでは如何なる有様であらう。現代に在つては、我等の中國は世界最弱最貧の國家である。今日世界に於いて中國人のものとして見出し得るものは一つもない。故に現在世界の列強は、中國に對しては總て之を割取せんとする意思、或は近來各國は中國を共同管理せんとする意志を有してゐる。何の故に、我等は嘗つては最強の國家でありながら、現在にかかる地位に變じてしまつたのか。之れ中國人たる我々が近來數百年間、居睡りをしてゐて、世界各國の進歩しつたことを知らなかつたからで、而も睡り乍らもなほ我等は數百年前かくも富強であつたと考へてゐた。睡つてゐたが故に數百年來我等の文明は退歩し政治は墮落し現在の様な局面に變じたのである。我々中國人は、今やまさに我等の現在の地位を覺り、速に如

何にして挽回救済するかの方法を考へねばならぬ。さすれば、我々中國はなほ救はるべきも、然らざれば、中國は最早、亡國滅種の地位に陥るばかりである。諸君、醒めよ、醒めよ、醒めざるべからず。

第二、今日、中國の安危存亡は全く中國國民が眠つて居るか將た醒めて居るかに在る。もしも我等が尙ほ睡つて居るならば、それは非常に危険である。若し我等が、今日覺醒し得るならば、中國將來の運命にはなほ大なる希望が存する。現在世界の潮流は總て新文明に向つて進みつつある。我が中國は若し諸君が覺醒し來つて新文明に向ふ此の道を歩むならば、幸じて各國のあとを追ふて前進し得る。今のところ覺醒せしむるべく、中國にはまだ望がある。何が故に、如何にしてか。それは我等自身が覺醒すればよいのである。我々有志こそは、思想もあれば、行動もある我等にして始めて此の國を救はんとする志を立て得る。諸君は能く次の事を知つて居られる。即ち中國は救ひ難いものではないことを。今後我々は此中國を救はんとして如何なる道をとるべきか、我々は即ち革命の道を行き、革命主義によつて中國を救はねばならぬ。革命主義とは、民族主義、民權主義及び民生主義で、これ等は即ち所謂三民主義である。民族主義は中國をして現在の列國と平等の地位、即ち國際上平等の地位に置かんとするもの、民權主義は本國の政治の主

權を國民の掌中に歸せしめんとするもの、民生主義は人々の生計上經濟上の平等を計るものである。であるから斯かる三民主義を、我等が若しよく實行し得れば、中國も亦列強の跡を追ふて進歩し、久しからずして一個の富強なる國家と變じ得る。

第三、諸君、今日の余の話をお聴きの方は、中國が再び幾千年前の強盛を恢復し得ると考へられるかどうか。若しさう考へられるならば、志を立てねばならぬ。志を立てんとするならば、この三民主義を研究せねばならぬ。三民主義を、余は最近廣東高等師範學校に於て、毎日曜に、毎回二時間講演した。民族主義は六回にして講演を終り、民權主義も六回で終りを告げた。間もなく更に民生主義の講演を開始する。大概、六回か八回であるが、未だ定つた譯ではない。此の三民主義の講演終了後、講演筆記を單行本として出版する。現在既に民族主義は出版したし、民權主義も亦遠からず出版する筈で、將來民生主義の講演終結後は、之れ亦同様に單行本として出版し廣く中國各省に傳へ様と思ふ。どうか諸君、注意して此の三民主義の講演をさぐり、極めて詳細に研究せられたい。其の中には好き道理と、新思想と、新發明とが甚だ多く、それは中國人の嘗つて耳にした事のないものである。此の演説は、余は非常に興味あるものと思ふから、諸君が此の書を購入ひ求めて御覽になる様、又讀了の後、注意を留めて詳細なる研究をせられる様希望す

る。もし三民主義を詳細に閲讀し、詳細に了解し得たならば、諸君は必ずや如何にして志を立て中國を救ふかを悟られるだらう。既に悟られた後は、三民主義を宣傳して一般の人にもすべて知らしめ、志を立てて中國を救ふに到らしめたならば、中國は非常に速に富強の國家となり、列強と肩をならべて馳驅し得るだらう。之れが即ち余の諸君に希望する所である。

第四、現在余は甚だ革命黨に對し多くの言葉を語りたく思ふ。一般も、中華民國は革命黨が幾度か血を流し滿洲人の清朝を倒壊して、漸く造り上げたものである事を知つてゐる。併し現在此の革命事業は既に官僚や軍人によつて破壊されてしまつたから、革命建設は徹底的に成功し得ない。故に我々革命黨は中國に於いてなほ甚だ重大な責任を負はねばならない。現在踏み出すべき第一歩として革命黨の三民主義を宣傳して一般國民に知らしめねばならぬ。第二の責任は、我々革命黨は従前の革命に學び、先に逝いた烈士と同様に生命を犠牲にし身を捨てて國を救ひ、中國の前途の爲めに奮闘し、自己の力によつて其の進運に努力せねばならない。以前の眞實の革命を學び、革命を藉りて個人の私利を圖り、革命への道を藉りて榮達の捷徑と考へ、官をあさり財を作ると云ふが如き、かかる偽革命黨を學んではならない。革命が成功してより後は、この偽革命黨が全國に充滿し革命の名を冒瀆したから、革命の成果は盡く破壊され往々にして國民は革命黨

とは如何なる事を做すものか知らなかつた。故に國民は今日の此種の偽革命黨を見て、かかるものが革命の人才であると考へる。我が眞實の革命黨は今日或る大責任を擔つて居る。即ち、徹底にかかる偽革命黨を排除せねばならぬ。我々は國民に對し我等の道德と革命的精神とを表示して國民一般をして眞實の革命黨とは國家の爲めに犠牲的であり、仁を行ひ義を踏み、生命を捨てて國を救ふものである事を知らしめねばならない。又奮闘的精神を以て國民を感動させねばならない。國民をして是非を知らしめ、眞偽を辨ぜしめ、眞實の革命黨とは眞に心より國家の爲めにするものである事を知らしめ、一般國民をして我等に追隨して革命に入らしめ、かくてこそ始めて中國は救はれるのである。

軍官學校開校式訓辭

——民國十三年六月十六日——

來賓、教員並に學生諸君。今日は本學校開校の日である。吾人は何故に此の學校を設立したか何故に此の學校を開設せねばならないのか。諸君は、中國の革命が十三年を経過しながら、現在得た結果は、ただ民國の年號有るのみで、民國の事實なき事を理解するを要する。かく觀じ來る

時、中國革命は十三年の今日に至つて僅かに單なる空名を得るに止つたのである。故に中國十三年間の革命は完全に失敗であり、今日に至るも矢張り失敗である。世界に於ける革命のうち、吾人以後に發生せるものの状態は、果して如何であらう。中國と境を連ねる事一萬餘里、歐亞兩大陸に跨り中國より更に大きな隣國がある。此の國は歐洲大戰前には世界の強國であり、歐洲大戰中即ち六年前に革命を起した。彼等の革命は、吾人に遅るること六年である。此の隣國とは何處を指すのであるか、云ふまでもなく露國である。露國の革命は、中國革命に遅るること六年後ではあるが、併し其の結果は、徹底的に成功してゐる、吾人が兩國の歴史を比較してみる時、對内的方面に就いて云へば、中國其のかみの革命は、外來の滿洲人に對するもので、滿清皇帝の威權は、吾人の革命する時代に於いては既に頗る弱く、政治も亦甚しく腐敗し居り、當時滿清の國勢は世界に於いて最も衰弱せるものであつた。之れを露國が彼等の皇帝を革命せる時代の状態に比較すれば如何であらうか。露國皇帝は露國人であり、且つ露國々教の教主であつて、國內に於ける權威は第一の人物であり、革命以前に於ける、露西亞の國勢は世界の最強國であつた。かく比較して見ると、中國は權勢の極めて薄弱な皇帝を革命し、露國は、權力の極めて強力な皇帝を革命したものと云ふべきである。故に對内的方面に就いて論ずれば、中國の革命は甚だ容易であり、露

國革命は頗る困難なものであつた。更に對外的方面に就いて述べると、露國が革命後、遭遇した障礙は實に大なるものであつたが、中國は革命後には毫も他から干渉を蒙らなかつた。革命前に在つては、外國人は中國分割の論など唱へ、吾人も革命の折に列強の干渉を受けるのを恐れたけれども、革命が發生してしまつてからは、列強には毫も異議がなかつた。併し露國は革命發生以後に到つて、外國人の妨害に遭遇した。それは實に言論のみに止らず、更に兵力の干渉さへ受け、各國の軍隊は露國々内に浸入し、英國、佛國、米國、日本及び伊太利、更に其の他小國の軍隊に及ぶまで、外國人は全世界の勢力を擧げて、露國に干渉したのである。かく觀じ來ると、吾人の革命は單に國內的に一個の甚しく衰弱せる政府に對したものに過ぎず、露國革命は、國內的には一個の權威頗る大なる政府に對し、對外的には實に全世界の列強を向ふに廻さねばならなかつたのである。故に、對外的方面に關して論じて、中國革命は頗る容易であり、露國革命はこれ亦極めて困難であつた。何故に、露國はかかる大艱難に遭ひ、さうした多くの敵に對し乍ら、尙ほ且つ六年以内に其の有する障礙を盡く打破し去つて革命が徹底的に成功し得たのであらうか。また吾人の革命の年月は露國に比して二倍であり、遭遇せる障礙も亦露國の大なるに及ばないのに、今日に至つても尙ほ革命が成功し得ないのであらうか。中國と露國の革命の結果が同一でない、

其の原因を研究して、吾人は大なる教訓を與へられた。そして此の教訓を悟つたからこそ、今日此の開校式の日を見たのである。此の教訓とは何か。それは、露國革命發生當時は、一般革命黨員が先鋒となつて露國皇帝に對して奮闘したが、併し一度革命が成功するや、直ちに革命軍を組織し、其の後は此の革命軍が、革命黨の後援となつて奮闘を繼續せるが故に、許多の大障碍に遭つたながらも、尙ほ且つ短時間内に大成功を告げ得た事である。中國革命の時に當り、廣東に於いて奮闘した黨員のうち最も著名なものは、七十二烈士である。また各省に於いて、身を捨てて奮闘せる黨員も決して少くはない。之れ等の先烈の奮闘があつたればこそ、武昌に一度義を起すや、即ち各省響應して、滿清を顛覆し民國を成立せしめ、吾人の革命は一部分の成功を收めたのである。其の後、革命黨の後を繼いで奮闘する革命軍がない爲め、部分的な成功を收め得て、今日、一般官僚軍閥は敢えて公々然と大膽に中華民國の正朔を變更し得ざるに至つたとは云へ、民國の基礎に到つては、何等存しない。此の原因を簡單に云ふと、吾人の革命はただ革命黨の奮闘があつたのみで、革命軍の奮闘がなかつたのに由る。革命軍の奮闘なき爲め、一般官僚軍閥が民國を左右し、吾人の革命が完全に成功し得ないのである。吾人は今日此の學校を開校せんとするに當り、如何なる事を希望するものであるか。其れは、今日よりして、革命の事業を更始一新し、

此の學校の學生を基礎として革命軍を編成しようといふのである。諸君學生は、將來革命軍の根幹である。此の立派な根幹を有して革命軍が出来れば、吾人の革命事業もそこで成功し得るのである。若し革命軍がなければ、中國の革命は永遠に失敗せねばならない。故に今日此處に此の軍官學校を開校する唯一無二の目的は、即ち革命軍を創造して中國の危急存亡を救ふことである。

如何なるものを革命軍と呼ぶか。諸君は此の學校に入學して勉學されるが、如何様に志を立てたならば革命軍となる事が出来るであらうか。如何なる資格を具へたならば革命軍となす事を得るであらうか。吾人が、如何にして革命軍たり得るかを知らんとするには、先烈を以て模範となす必要がある。先烈を模範と爲さんとするには、革命黨に學び、革命黨の奮闘に學ぶ事を要する。革命黨と同様に奮闘する軍隊にして始めて革命軍と呼び得るのである。中國革命は既に十三年を経過したが、其の使用する軍隊には、少しも革命黨の奮闘と同様の點がない。余は敢えて云ふ。此の十三年以來、中國には革命軍と呼ぶべき軍隊はなかつたと。現在廣東には、革命黨と共に奮闘する軍隊は決して少數ではないが、余は敢えて彼等を革命軍なりと云ひ得ないのである。彼等の此の軍隊は、既に吾人革命黨と事を共にして居るのに、何故に余はなほ之れを革命軍と呼ばな

いのであるか。余が敢えて、革命軍の名稱を之れ等の軍隊の上に冠しない所以の理由は、即ち彼等内部の分子が、あまりにも雜駁であり、革命の訓練を経て居らず、革命の基礎を有しないからである。では、革命の基礎とは何であるか。即ち、革命の先烈と同様の行爲が無ければならぬ事である。彼等と同等の行爲を指して、革命の基礎と云ふのである。現在廣東に在る多くの兵士は先烈のさうした行爲に對して、一向其の優れた點を理解するものがない。しかのみならず、現下の中國は、民窮して財盡き、一般の人みな生きんとするに道なき有様であり、其れ等の人々は、其の志を得ない前に、生計困難で家庭の煩累を受ける爲めに、擧つて革命を求める。併し、其の後、稍々志を得るに及べば、其の服従する總ての革命主義を、盡く九霄雲外に投げ捨てて、一向頓着しない。故に、二年前には、革命の同志と稱した陳炯明の軍は、觀音山を砲撃して、南方政府の基礎を覆へした。嘗つては革命軍として同政府の下に在つた軍隊が、利益を異にするからとて、遂に戈を倒ほして敵さへ爲し得ざる程の行爲を爲したのである。之れによつても知る如く、革命主義を理解せぬ軍隊は、何としても私利私慾の觀念を除去する事が出来ない。若し彼等自身の利害と相反すれば、直ちに之れに依頼しない、爲めに吾人の革命はすべて失敗して來たのである。

余が、今日此の地に來つて諸君と相語るのは、既往の成敗を以て當に一場の大夢とし、すべて之れを顧慮する事なく、今日より一新して革命の基礎を創造し、新に理想的なる革命軍を建設せんが爲めである。諸君は千里、或は數千里の道を遠しとせずして、本校に入學せられたのであつて、既に吾人の革命軍をつくらんとする主旨を理解されて居るからには、必ずや革命事業に努力せんとする志に燃えて居られるに違ひない。革命事業をなすには、先づ如何なる方面より着手すべきであるかと云ふに、自己自身の事より始めねばならない。自己が從來有する、好ましからぬ思想習慣及性質、例へば獸性、罪惡性及び一切の不仁不義の性質は、すべて除去し改善するを要する。故に諸君は政治上の革命を行はんとする前に先づ自己の心中より改革せねばならぬ。自からその心中の革命を斷行し得るならば、將來の政治上の革命に對しても、亦成功し得る希望が生ずる。若し自から心中の革命を斷行し得ないならば、現在斯様に設備の完全なる軍官學校に在つて、軍事學を研究するとも、將來決して革命軍となり革命事業を遂行する事は不可能である。故に諸君は、革命を欲するならば、先づ革命の志を立つる事を要する。今日、革命の志を有すれば、將來當に革命軍の幹部たり得るであらう。吾人が革命を成功せしむるには、即ち今日より、志を立てて、一生一代を通じて、官位と資財とを求むる心を斷ち、ひたすら救國濟民の事業を行

ひ、三民主義と五權憲法を實行する事のみを知つて、一意専心革命を志してこそ、革命の目的に到達し得るであらう。若し然らざるれば、諸君が將來軍隊をつくつて、屢々交戦して勝を博し、廣大な土地を有し、數萬人に擴大されようとも、それは斷じて革命軍と呼ぶ事は出來ないのである。

現在の中國に於ける不良軍人は二派に分ち得る。一派は、革命黨内部に在る軍人である。此の一派は、口さきでは革命に賛成し、行動では革命に反對してゐるから、口是にして心非なるものと謂ふべきである。他の一派は革命黨外の軍人で、此の派の軍人は完全に革命に反對し、ただ官位昇進と蓄産とのみに心を費し、時々刻々共和を顛覆して専制を恢復せんとして居る。諸君が將來共和を維持し、かかる軍人を絶滅せしむるには、現在に於て志を立て、將來成功の後、私利私慾の師團長、旅團長又は一般横暴無道の軍閥とならざる様、心掛けなければならぬ。諸君にして此の志を立てたならば、革命の第二の段階に達する事が出来る。革命の第二の段階とは何であるか。即ち、革命先烈の行を學ばねばならぬ事である。革命先烈の行爲は、他に特長が有る譯ではない、ただ一身一家、生命を惜しまず、一意専心國の爲めに奮闘したのみである。従前の奮闘ぶりは如何なる有様であつたかと言ふに、大多數はみな徒手空拳により、拳銃、爆彈があれば極め

て精銳な武器と考へ、義軍を起す毎に、僅かばかりの此の武器を用ひて、清兵と奮戦したのである。當時全國の清兵の數は幾何であつたらうか。旗下綠營、海軍、巡防營があり、其の後には又新式軍隊が編成され、總計百餘萬を下らなかつた。例へば辛亥の年三月二十九日の如きは、廣東城には李準の海軍、張鳴岐の陸軍、燕塘の率ゐる多數の新式軍隊、及び滿洲駐防軍等、合して總數五六萬の清兵がゐた。而して當時革命黨の人數は數百人に過ぎず、その中、革命による死者が七十二人であるから、生存した者は勿論頗る少數である。當時突撃隊となつた人々だけはみな武器を有し、此の武器を有する者は三百人に過ぎなかつたが、戦つた敵兵は三萬人以上であつた。革命黨は僅に三百人を以て敢えて三萬餘の敵兵と戦つた。これ實に革命黨の見識である。革命黨の見識は、すべて敢えて一人を以て百人と戦ふものである。今此處に此の話をきかれる人の多數は、軍事教官と軍官學生である。果して軍事學を研究して戦術中に斯様な道理が存在するであらうか。一人が百人と戦つた實例が存在するであらうか。余の考では、古今東西を論ぜず、斯様な戦術は更に見當らない。普通の戦術では一人を以て一人と戦つても、駄目である。昔の兵法はみな倍すれば則ち之を攻め、十なれば則ち之を圍むと云つて居るが、近代の戦術では、一人を以て一人と戦ふ時は、守るか然からざれば退却かであつて、かかる戦術を古今を通じて正當なる戦術

であると呼ぶ。廣東十三年前の革命に至つては、一個人を以て一個人と戦ふに止まらない。しかも廣東を守る敵軍はいづれも小銃大砲を有してゐたが、廣東攻撃の革命黨には僅かに拳銃、爆弾有るのみであつた。そして戦の結果として革命黨員七十二名が殺され、後世の人は失敗だと考へて居る。併し、革命黨は總督衙門を攻撃し、兩廣總督を走らしめた。故に局部的な戦ひ其のものに就いて論ずるならば、當日の廣東城内の戦は、成功といふも可なりである。其の後遂に失敗したのは、全く豫期せる援軍が到着しなかつたのによる。彼の突撃隊が三百人であつた事、及び武器も一向精銳でなかつた所から推して、若し各人が精銳な武器を有して居たならば、當時の革命は或は成功したかも知れぬ。決して絶対に成功の望がない譯ではなかつた。吾人が事後に、敵味方の状態を詳細に比較してみると、其の革命の不成功は、決して三萬人の敵軍がよく三百人の革命黨員を撃破したからではない。實際は、革命黨内部の計劃が完全周到でなかつた爲めである。若し義軍を擧ぐる以前に、計劃が完全周密であつたならば、當時の革命も亦、絶対に成功の希望を抱き得ぬものではなかつたのである。

辛亥の年の革命は、廣東起義の後また武昌に於て義軍を起し、武昌起義の結果は成功であつたが、當時武昌に於いては、漢口の革命黨員は總計三百人たらずで、眞正の革命黨員は數十名に過

ぎず、有する所の小銃は、いづれも弾丸が無く、到る處を搜索して、漸くにして二盒の弾丸を得たが、合計五十發に過ぎなかつた。革命黨員は五十發の弾丸を分配して、城内の工兵隊の兵營中から事を發した所、城外の砲兵隊はたちどころに之に響應し、二門の砲門を開いて城内に進入し遙に總督衙門を攻撃し瑞徵を追つて武昌を占領したのである。當時武昌に駐在せる清兵には、第八鎮の新式軍隊、揚子江の海軍、其他巡防營の舊陸軍があつて、合計二萬餘人に上つて居たが、革命黨は僅に數十人を以て二萬餘人を討つたもので、一人にして五百人と戦つたと云ひ得るのである。廣東起義に在つては、一人を以て百人と戦ひ其の結果は失敗であり、武昌の起義は一人を以て五百人と戦ひ、其の結果は成功を収めた。いづれも極めて少數の人数を以て極めて多數と戦ひ、廣東に在つては失敗したが、武昌に在つては成功した。故に革命的奮闘は、一概には論ぜられない。此の奮闘は、古今内外、各國の兵法中にも見ない所で、ただ革命の歴史中に在つて此の新例をひらいたのみである。吾人が革命を繼續して絶えず前進する時、少數を以て常に多數に勝つと云ふ事は許されない。諸君教官は、外國に學んだ人もあり、また保定に在つて學んだ人もあるが、從來各國陸軍の學校に在つて教授する學問は、みな尋常一様の軍事學であり、概ね尋常にして極めて規則立つた普通軍事學である。今日學問を成就された教官は、再び學生に教授

する場合必ずや、さきに學ばれた普通軍事學を以てされるであらう。故に學生諸君が本校に在つて學ぶ所の學問は、大概、極めて尋常な、規則立つた普通學である。諸君は専ら此の學問によつてのみ革命軍たり得るであらうか。革命軍たる學問は、専ら學理中からのみ求められるものではない。之れは志を立てる事により發揚されて來るものである。諸君は學習研究の時代に在つては當然教官の指教を仰ぎ上長官の命令に服せねばならぬ。教官が教授しただけは、明瞭に理解するを要する。若し極めて聰明絶倫の人ならば、或は藍より出でて藍よりも濃きものも有らう。併し天才でない以上、ひたすら教官の教授する學問を徹底的に了解し、將來大いに用ふる所があらねばならぬ。諸君の現在の境遇と從來の革命黨とを比較するに、以前の革命黨は誰一人として充分なる軍事教育を受けた事がないが、諸君は現在本校に在つて尠くとも六ヶ月の訓練を受ける。また以前の革命黨は單に拳銃を有するのみであつたが、諸君は現在いづれも結構なる小銃を有してゐる。以前の革命黨が事を發するに當つては、一地方に集合する者最も多數なるも二三百人に過ぎなかつたが、今日本校には既に五百人が集つて居る。諸君がかかる恵まれたる基礎を以て、若し果して眞に革命の志氣を有せんか、此の五百人と五百挺の銃を以て、一大革命事業を實行し得るであらう。

軍隊のよく革命し得るか否かは、將士諸君が革命の志を有するか否かに由るので、武器の精良と否とは關しないのである。若し革命の士氣無く、革命の道理を研究しなかつたならば如何。滿清末年の訓練せる新式軍隊や陸軍がいづれも精良なる小銃大砲を有し、海軍も亦堅牢なる戦艦、水雷艇を有し乍ら、武昌起義の後には盡く革命黨の手に歸した如く、全く革命事業のために用ふる事は出來ない。畢竟、革命は非常の事業である。非常の事業は、常識的な理論を以てすべきではない。從來、日本及び歐米各國に留學せる海陸軍の學生は、吾人が彼等を革命黨に加入せしむる様にいくら運動しても、多數は加入を肯んぜず、終始革命に反對した。彼等革命に反對せる有識軍人の心中はどういふ考であつたらうか。詳細に調べてみると、彼等はみな一種の先入主に捕はれて居て、自ら軍事専門家を以て任じてゐた。従つて我が革命黨が一人を以て百人と戦ひ百人を以て一萬人と戦ふ事を主張するのを、彼等軍事教育を受けた人々から見れば、之れは古今内外の戦術に嘗つて見ざる論であり、決して成功し得ないと考へられた。此の道理に就いては深く辨じ様とは思はぬが、ただ其の後の中國革命で滿清を顛覆したのが、誰であるかを知ればよい。革命成功の折には、勿論多數の軍事専門家の援助を受けたが、併し其の流を究め源に溯つて、原動力を論ずれば、矢張り少數の革命黨から發して居るのである。當時一般の有識軍人は、極めて

少數を以て極めて多數を打破することは、戰術上決して成功し得ざる公理である事から推して、此の道理に賛成しなかつたので、それで革命に賛成しなかつたのである。彼等軍人達がいづれも革命に賛成しなかつた爲め、従前の革命黨には眞に軍事知識を有する人は頗る少數であつた。辛亥の年、革命が大成功を告げた所以は、全國に既に革命が発生した後に、段祺瑞が一般軍人を結合して、名を聯ねて通電を發し、共和に賛成したので、始めて滿清を顛覆する目的を達し得たのである。即ち革命黨が格を下げて彼等の意見を容れ、一般軍人を抱擁した結果、其の後は軍事上にも順調な勝利を博したのである。故に辛亥革命の成功には、實際の話が、眞に軍事的學識ある軍人は與からなかつたのである。諸君はよく記憶されたい、革命は非常の事業であつて尋常の事業でない事を。そして非常の事業は決して尋常の道理を以て一概に論ずべからざる事を。現在學習時代に在つて學び得た事は、更に革命精神を以て之れを利用すべきである。若し革命精神なくんば、一生學んで遂に老に至るとも、滿腹の學問を徒らに知るのみで、少しも用ゐる處はない。吾人は現在此處に此の軍官學校を開校したが、北方の官僚軍閥は、夙に保定軍官學校及び北京陸軍大學を設けてゐる。本校と彼等の學校とを比較するに、彼等の學校の成立は既に年久しく、人數も頗る多く、設備も完全である。故に本校の之れ等の點は、いづれも彼等に比して遠く及ばない

若し専ら物質方面よりのみ比較し、常識に照して論ずれば、吾人は如何にして能く中國を改造し得よう。然し北方の將校及び兵士が一個所に集合して軍隊を編成して居るのは、單に官位と財産のためであり、また食ふべき飯と着るべき衣服との爲めに過ぎず、毫も救國濟民の思想と革命の志とを有しない。嘗つての滿清時代に於ける將士も上述の如きものであり、現在まで殘存して曹錕や吳佩孚に従つて居る者も、亦かかる將校士卒である。吾人、軍事知識を有せざる革命黨が、さきには滿清を倒し得たのである。將來の軍事知識に富む革命軍は、固より更に曹錕吳佩孚を倒し得る。吾人現在の地位は、よく曹錕吳佩孚を倒さねばならぬに過ぎないが、根本的には、更に革命精神を有してゐなければならぬ。若し革命精神がなければ、彼等は多數で武器も有るから、吾人はよく彼等を絶滅し得ないのみか、却つて彼等に打破せられるであらう事を恐れる。露國は六年前に一度革命を發して、同時に革命軍を組織し、以後着々として其の組織を進行せしめた。之れ舊黨と外來の敵とを打破して大成功を告げた所以である。吾人が現在、此の學校を開設するのは、即ち露國の輩に倣はんとするものである。中國革命は十三年にして、今日漸く此の學校を設立し、革命軍を組織する。之を以て、凡そ一個の新國家を建設するに、革命軍が斷じて微力であつてはならぬ事を知るであらう。

諸君は本校に入學され、また今日余の此の話を聽かれて、自然と革命軍たらんとする志を立てられたであらうと思ふ。革命軍たらんとする志を立てるには、先づ如何なる基礎を有すべきか、深遠な學問を以て根本とするを要する。深遠なる學問があれば、大膽となり、大膽になれば、革命軍たり得る。故に革命軍たる根本は矢張り深遠な學問に在るのである。では深遠なる學問を成就するには如何なる方法を以てすべきであらうか。深遠な學問を成就する方法は、單に毎日講堂内に於いて、教官の授ける學問を學ぶのみでなく、なほ一隅をあげて三隅を知り、自からこの知識を事物上に推し廣め、更に講堂外に在つては、自修の工夫を重んじ、軍事學並に革命の理論に關する各種の書籍及び一切の雜誌新聞を參考として研究すべきである。研究して會得せる後、一旦融會貫通したならば、自ら革命精神を發揮し、先烈の志を繼いで身を捨て血を流し、斯くて中華民國の基礎を築き、三民主義を完全に實行し得て露國の如く革命は大成功を告ぐるであらう。若し、革命が成功し得なければ、中國は亡び、四億の人種は其の跡を絶つであらう。假りはいづれも諸君自身の利害に關するもの、之れは救はざらんとするも能はないものである。此の危急存亡を救ひ得るものは、只革命軍あるのみ。故に吾人は何としても本校を開校し、革命軍を

つくらねばならぬのである。革命軍は、救國濟民の軍人であり、諸君はみな將來革命軍の根幹として救國濟民の責任を擔ふ人々である。既に救國濟民の責任を有する以上、今日より以後、先づ學問の上で舊に倍して奮勵するを要する。而して將來卒業の後には革命軍を組織し、共和の障礙に對しては、更に彼等と戦つて命を擲ち、よく一人を以て百人と戦ふ事を要する。此の一人を以て百人と戦ふ革命軍の本領は、主として何によるものであらうか。革命軍たるの資格は、如何なる人を以て標準と爲すべきか。簡単に云へば、之には先烈を以て標準とするを要し、先烈の行爲を學ぶを要する。彼等の如く、一身を亡きものとし、一切の權利を犠牲として専心救國に努める。此くの如くにして、始めてよく死を恐れざる革命軍人たり得るのである。革命黨員たるの資格は、即ち死を恐れざるに在る。如何なる方法を以てすれば、死を恐れなくてすむであらうか。此の方法も、説き來り説き去れば、結局矢張り我が先烈を學ぶことにある。余は今日此處に在つて諸君と相語つて居るが、とりもなほさず生殘りの革命黨員である。以前毎度の革命には、余は常に之に参加したが、決して一度たりとも生を貪り死を怖れた事はない。併し毎回流血の運命は余の身の上に振りかかつて來なかつたので、それで、今日もなほよく諸君と談ずる事が出來て、死を怖れざる道理を諸君に口傳する譯である。余は敢えて云ふ、革命黨の精神は他に何等秘訣はない。

秘訣は即ち死を怖れざるに在ると。よく此の大勇氣を有し得れば、心中自ら死を視ること歸するが如くなるであらう。人は何時かは皆死なねばならぬ、がその死は、よく仁を成し義を取るものでなければならぬ。此の道理を理解すればこそ、死は吾人の歓迎する所であり、敵の銃丸砲彈にあつて速に死に得ることは吾人の歓迎する所であると云ひ得るのである。かかる大勇氣と大決心とを有すれば、吾人は一人を以て百人と戦ひ得るのである、何となれば、敵の觀念たるや生きて以て幸福を享樂せんとするものであり、吾人の觀念たるや、死して以て幸福を享受せんとし、死するに其の所を得んとするもので、生死の觀念が、敵味方兩方面の精神をあまりにも懸絶せしめ、敵は對抗するを得なくなり、吾人には常に勝利こそ有れ、敗北はないのである。

此の死を以て幸福と爲し、速に死せん事を求むる道理は、決して架空の理想ではなく、完全なる事實として現れてゐる。嘗つて、日本に在る一中國留學生、陳天華君は、革命精神を大いに發揮した。即ち革命の時機がなほ未だ到らざるため死を求めて得ず、遂に日本に於いて海に投じて死し、死を以て中國に報いた。又、英國に於ける留學生、楊篤生君も革命の道理を理解したが、革命の時機なく、革命事業を實行し得ない爲め、且つは中國の甚しく腐敗せるを見て、速に死して以て幸福を享けんとし、竟に英國に於いて海に投じて死し、死を以て中國に報いたのである。

陳天華、楊篤生の如きは、如何なる人物であらうか。彼等は即ち革命黨員であり、熱心血性の眞個の革命黨員であつた。彼等はいづれも死所を求めて得ず、故に窮して海に投じて死せる者で、實に惜しみても餘りがある。然し、陳天華、楊篤生の兩人が海に投じた事によつて、一般人に革命を理解せしめる事が出来た。革命的精神を感受せんとするには、革命の道理を理解すれば夫れでよい。さすれば死を視る事歸するが如く、革命のための死は最も高尚であり、甚だ得難く且つ甚だ愉快なものだと思ふ様になる。即ち戰場に於いて自己の主義上の敵に遇ひ、其の銃砲彈を受けて死ぬのは、當然其の死所を得たものだと思ふに至るであらう。以前の眞の革命黨員は、みな此の死を楽しむ性質を有してゐたから、敢えて一人を以て百人と戦ひ、屢々事を擧げて革命を行ひ、革命は克く成功するに至つたのである。この先例は、古今内外の兵書中には絶えて無き所であり、ただ革命史のうちのみ此の故事は有るのである。此の事例は、非常の例であり、吾人が此の非常の先例を學ばんとするには、非常の士氣を有して居らねばならぬ。非常の志氣があれば、よく生死の關頭を看破し得て、死を以て幸福とし得る。若し各人總てが、死を以て幸福となすならば、即ち百人を以て一萬人と戦ひ、一萬人を以て一百万人と戦ひ得る。従つて吾人に現在一萬人の革命軍が有れば、直に中國を平定し得るのである。何となれば、目下革命に反對する全

國の軍隊は、合計一百万人に過ぎないが、目下吾人に一万人の革命軍がない爲に、彼の貪婪無道の軍閥が全國に横行して、惡として爲さざるなく、事毎に國を害し、日毎に共和を顛覆せんとしてゐるのである。余は共和を維持し此の貪婪無道の軍閥を絶滅せしめんとしてゐる。されば諸君に對して死を怕れず、一步一步革命先烈の跡を追はれん事を要求し、更に此の五百人を以て基礎として我が理想の革命軍をつくらんとするのである。此の理想の革命軍さへ有れば、吾人の革命は大いに成功を収めるであらう。そして中國は救済され、四億の國民は滅亡に至らずして止むであらう。故に革命事業は、即ち救國濟民の事である。余の一生は革命である。即ち此の責任を擔ふものであるが、諸君はいづれも本校に在つて學ばれんとする者であるから、余は諸君に、今日より共に此の責任を背負はれん事を要求するのである。

昭和十五年十二月十五日 印刷
 昭和十五年十二月二十日 發行

不許
 複製

「孫文全集」(第五卷)

定價壹圓六十錢
 (外地定價壹圓七十六錢)

譯者 外務省調査部

發行者 上村 哲彌
東京市京橋區銀座二丁目二番地三

印刷者 並木 順作
東京市麻布區新廣尾町三ノ八七

東京市京橋區銀座二丁目二番地三

發行所 第一公論社

電話 東京橋六四七三番
 振替 東京六一八八六番

6298

孫文全集目次

第四卷	第三卷	第二卷	第一卷
大亞細亞主義 革命方略 講演及び談話(上)	五國國民權憲法 國民黨憲法 地方自治 政治開始 實行法	建國方略	三民主義
	本圖目次	刊 既	刊 既
	第七卷	第六卷	第五卷
並 索 引	遺書 電文 孫文主要著作年表	雜 著 宣 言	講演及び談話(下)
			刊 既







